

《もくじ》

- 特集:原発立地計画を「断念」させた町はいま
2頁・原発を止めた民の叫び・巻原発
……………高杉 晋吾 (正会員)
- 5頁・生涯一記者を宣言した北村博司
さんの勲章・芦浜原発:蒲生田原発
……………矢間 秀次郎 (共同代表)
- 9頁・心に共生の絆を感じさせる信濃川
……………樋口 美作(正会員)
- 11頁・水の時代をひらく
……………奥井 登美子 (薬剤師)

奔流

《第7号》

- 発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL 042-381-7770
- 発行人・根津 東六 (共同代表)
- 編集人・矢間秀次郎 (共同代表)
- 〒振替・00120-0-710488

題字揮毫・梅原猛

大河の一滴 ⑦

土台を知る — 土壌は人間労働の産物 —

富山 和子 (立正大学名誉教授)



「液状化」とい
えば、私などは
新潟地震を思い
出すが、東日本
大震災以来、古
地図など求めて書店を歩く人が増えた
という。我が家の土台がどうなっている
か、土地の来歴を知るためである。

これは大事なことである。我が家の土
台だけではない。毎朝使う蛇口の水。そ
の水が誰によりどんな歴史を経て作ら
れてきたかという「いのち」の土台。つま
りは「自分が誰に養われているかを考
える謙虚さを、子どもたちに育てて欲し
い」と、都市の先生方にはお願いする。

私の経験をいえば、水問題に取り組ん
だ当初、「川の水はなぜなくなるらないの
と、子どものような疑問から出発した。
そして行きついたのが土であった。水は土
壤の産物であり、森林は土壌の形成者。
その土壌は日本列島にあつては、人間の
労働の産物である」と。

そしてひとたび土台を踏まえると、い
ろんなことが見え始めた。それまで誰も
考えなかったようなことが見え、世間を

驚かせることになった。堤防、ダム万能主
義批判もそうであったし、「水田はダム」
の理論も、「森林は海の魚を養う」もそ
うであった。今では「漁民の森が全国に
百カ所以上もあり、誰が自然の守り手か
という私の当初からの命題も、この一事
が明快に答えている。

「水田はダム」にしても、ふしぎであ
る。弥生時代以来みな同じ風景を見て
きた筈なのに、私が逆のことをいい出す
まで、農業は水の浪費者というのが専門
家や世の常識であり、「農水征伐」が都
市の水行政のテーマだった。違う違う、と
私は訴え、ついにカレンダーまで作ってキヤ
ンペンを続け、その結果今では世間も
納得して下さっている。

土台をふまえると、彼我の文化の違い
も見えてくる。「畑と水田とは違う。そ
れは経済や社会の仕組みをも変えさせ
る」ということに気づいたのも、四十年近
く前、初めてヨーロッパの葡萄畑を歩いた
ときのことであった。やはり同じ頃、中
国雲南省に滞在して、今では世界遺産
になった雄大な棚田に感激し、それ以上
に圧倒されたのは、帰途雲南を抜けて

長沙へ向かう夜汽車の車窓からの風景
であった。省と省との国境に横たわる山
脈。その山岳地帯で私が見たものは、谷
底から頂まで数百メートルか、それ以上
もあるかと思われる絶壁に、下から上ま
で無限に刻まれた灰色の段々畑の、どこ
までもつく風景であった。

土地を使い果たし骨と化したその廢
墟の山々に、私はそこに到る長い長い文
明の足跡を思い、ひるがえってこの小さな
山国で、土を止め土を養い自己完結型の
国土を維持してきた日本の、有り難さを
思った。

いま私たちはTPPという悪魔の政策
に直面している。このまま進めば国土も
文化もめちゃくちゃになり、山と川と平
野の列島の姿はなく、辛うじて残されて
きた日本人の感性に到るまで失われ、つ
まりは日本人のアイデンティティも失わ
れ、私たちは地球の浮浪者になる。

農業は単なる食料の工場ではないぞ
と、いま心ある研究者たちが立ち上がり
て、この国の土台を守るための、
「瑞穂の国学会」を作ろうと、準備中
である。瑞穂の国。いい名ではないか。皆さ
んも一緒に土台を見直していこうでは
ないか。

*著書代表作『水の文化史』文藝春秋、
『水と緑と土』『日本の米』(中公新書)
『環境問題とは何か』(PHP新書)。